



河
 云
 詠
 詠
 舟
 を
 根
 の
 峰
 也

中村俊定文庫
 文庫 18
 611
 4





雜諧問答青根峰卷之四



浩々舎芳麻呂校定

自得發明辨

森許六

一師凡云云向未甚事諸門中疑号乃中より未しい了
見る凡云云也案前より尋未れいそりし澤山成りたり
云云予云云家ありし時懐義ありけ度を見出たり予
案一極多し凡題を箱に入てそ名所よりありて箱紙
五つありて乾坤を尋るなり乃云是也さしは

字案所澤もありやいけ大拓

と云ふ向いおれんやい厚り予
の疑ひ云云疑号れ中より尋て新

家更なるいふれたるや万一たりて事系あつたるに
溝家此人同様に用ひ置かば時同し曲端と云ふべし
と其孫も亦も抽ふまゝ一わて下り乃助同し取られ
事難ひなり師にて幸國遠里此人亦も亦も中を
出し竹人曲論を記しお束一たらん子ハ親如書し
遠ひ親ハ此此と名別其も抽也師の云く教ハ
物と思ひ竹人一之を取合てよ一なるあまどと
有り難も教也され程よに教わぬ事なり有す人
上よよて其候事なりと云ふ一ありたりと云ふ
あま一候の付いお何おまよくとらと云ふ一竹
也是れ也

と云ふる所也平句猶も之を忠儀に度あはれ能
といふ此を忠儀詞の更也け何を知らぬ人の
通し〜かん平け此梅の香の取合小清黄桜と
出して申れ七文字も〜に云ふもすり〜に

梅の香也 何れも香し〜法黄桜
梅の香也 何れも香し〜法黄桜

有定色くにおきて見れ〜も道具を合抽よ〜も
是是中へ入る言葉性小と地なり〜もあま
尋の中〜

非七言六言五言四言

都人の病一か多に細代に那

といふなりきり都人其挨拶よふに思ひてその流るれと
も五里合符也け句おたる借り作りに能た挨拶は仕括也
此そ加人しあや吐年いさもそ人それと一當りておし
出たら故よきし作也

又云未來れ句あまあまもいさ年も七子も先乃句をあまも
也未練の者けんの針せん方をそれた事如扱ふさひ作れとも眼けんあよし
きさる度也たそ人の花と云歌よそあ句所居せし時あし一
出ると一向るも時をこい前あしきさる所とま早速くのびられられ
より抄を尋る是未來の句眼前小志れさ

一亦云雑諧の拍子ちやうどといふ趣しとま拍句の好く下れ句を物
数かずあししてあを押おさへさるる上はれ句も下はの句も一まをゆるれ
り是を拍数ちやうどなりと云いん

又云雑諧のちやうどといふもたそのやわれとも何人あてわお
ひひてあま一作れハ故程を拍やあまハ歳且ハ更まへ世ゆつてお
拍と思ふは不能の句ちやうど稀也せい兼かみの廣ひろた物るれいさしと
思ふは又拍や一能を句出さるる是ゆつたりの度也
一文文字いちぶん如形じゆがたさる句人拍ありて一文文字いちぶん紙かみむとさる由
り句也

比良よりわん ちやうど

とらふふ久し見ふ又なるし予 海小舟行の時早速船舟や
也此の又文字は居人あつて自門人者人あつたをさるゝの
時師れ云凡兆る向ふ

夏つむうんれ 乃 雨

この句よ又字粒も情を費してあへ出しと下意やと
小文字と居人さりと結りあつて同一の文字と居人あつて容易
小出ると出るとさういふさう子細な人しと思ひに思ひてあつた
まゝ小籍舟とみふ又字は合ふ也下意といふ又字は小舟の
舟の血脉を入れたらまゝさうこれ又文字同一事と思ふ人の又
字をさるゝ事は成るゆゑきや又さる由ある時

濁りといふ 其 ことら

この句よ小文字が粒れら 是容易小出ると又字小舟ははれ
魁魁と入れた又字なれあつた

大義して濁りといふ 其 義

此の句よ又字をさるゝと又あつ時米通る

あへて粒所れ 乃 是れ

この句よ小文字を粒むらの本義で粒な変りしと思ひ
不なれは容易に又字をさるゝとを新しみる一語句小舟
粒をさつとあつて實と粒とをさるゝといふ又字をさるゝと粒を
に入ると又義とあつた

田れ草一りおられし

こゝろより出し下めななり頼むと云予こゝろあり正當に指
せしや世後と指しし亦汝村より

操 干葉此日のより

といふ五文字代のをむはそと里あつた揮乃きや〜といふ又
まをなほ〜より思あするふ美奥汝村より小松のほ〜より白
中に血脈の糸あり李由朱迪より白小血脈の糸ありたは〜より
容易小おうれほ〜ておれ向成〜

一正辛古事をもむ〜吉又猿〜のふ後指れ〜その種屋作れ
変を〜ぬ乃扱〜より〜予〜集れ時事由〜云法云法〜

後お公くわうひやくとせまの百官へあふ保れとほみよいんぎの葉ふ名あや書付あり
よと〜出る事古事也けは変向小作らんと〜予〜云是よ
れ古事也ごんじを境の〜に志〜し〜り〜り〜志〜れ〜し向作ら
ぬと〜古〜小落ん〜り〜報書向向よ〜て入れら〜し法玄猪
乃向に仕立た〜と〜大ふぬ〜か〜る〜し〜と〜ら古事古事等〜予
種屋れ時向作りを〜ぬ〜し〜て〜

雪敷丸や穂屋れ為の川跡一

法玄猪心とて報書れ落葉の如 李由

法玄猪心とて報書れ落葉の如 李由

法玄猪心とて報書れ落葉の如 李由

山科や土石のこまな菊は茶同
皆徳屋の拾遺より作らぬ句也

一五合也のあやうたうの猿籠

干麩も空色は瘦も寒乃肉海

角大少井は結麩の子乾か 行六

是合也の瘦れ九合めて作らぬ句也

一昔も近年も前書より事味は白れ 謙保して是あはれ

云拙小遊は前書して謙保れらめて字つら句有らぬ句也

是あはれは前書とらぬ其の句は是と流敷変や一年

江戸も晋子句は是とあはれを予め結て云く 謙人

草一は句は少い云々は謙保けしして是なして其書一
の句は是して

散れ射は風もきのまにけしは花

是也は謙りるる予云はれは予はらの謙人な書一は句して

是乃名人を謙保れとては晋子の云何答て云け句けしめて

は云是は故は保ふる予と云前書して謙保の句は是し

猿もの小いやと謙保れと晋の猿一もては変中入屋一と

未書此事と云ら謙人けしは性小少の未書一と句は是と

増一たり臨通は月此山乃句合也は品け一の句より云はぬな

し予此時臨通は未練本不変は志はら晋子の書一は句して

ありしより夏初里て句を虫一舞ハ前虫を流多小流通只けー
の句く思ひそのより集み入る里蛇事先生いふ言を也まき
きし又云予々集れ時事由云跡暑れ句なり入るといひて

下帯り跡跡ありさ也

とら句を虫出せら下如又事有やそ予小お漢して也
く並事とと冷合お相り予云此句又事あれと一句を
見ぬてむりしからん品のみゆよそのれられよとて

下帯れあさりに跡ありさ也

と句ふのへらけ句中にていひ是は是知人けーの
場而そあ虫今句也別賜請食傍といふ事をほけら

是の括り

一い法とやこん屋れ忘の時雨と云ふ事といひ出しては漆乃窓と依
傷れ痛も思々止後二年を如るもそ正秀三つ物事と云ふれ
若り緝屋の忘といふ事をほけらけ男も緝屋れ忘れん
付事と云と柱もひくささわ予案りそのい正秀と云
句乃大平句道奥事三をえらり正秀も眼性なり予緝
屋れ師ふ血脈あり事付れとも愛句れ乃奥水こん
あやまうりたりと云とらあ里正秀ちれをれをむせひて事
ことれこれ乃奥ふより事三なりあ句の忘事しこん屋
乃奥心よりさのたれよりまう正秀かた時あるよりえ

ひるもよしかけ海舟とくけ蛇もよしけり
ち免らるる幅半もよし加やうに一周の味をわけて
うごくをればこれ平句乃道具なり一切動くものなるを
性小変定し直したぬ
一ひくせ能滑り雨そひいとたぬ此泥ふよこれき歌ハお
いとそ六句めり

泥よりよき歌の凡の綱此目

とらふ句一其次此年毎法句一

朝家ふよられて涼し凡の泥

ささふ力出さう初てあな句此乃具きる変を初れとあう

凡の泥平句おてゆえを越されきる念きまこれ眼
たぬらかりさるあやけ泥より性小場所を知れぬ
一栄且三の物法事

耳此三の物小抱いてるよくまうと引附し出しゆれとも難
一人秀う歌とよふ人もう師凡を傳ひしあひくさ三の物と見
く性小変定し年と花やふ仕立せせとも誰も見ものなけ
まの其分うて互吉とけ減りぬに於き事なりけ三の物能滑
と常式のをいと思ひあや大たふあやゆらや平三の物と
を能変天晴て下に肩を双ふささるれあふいとととれと
にきれくさるも同一さ思ひあふ人ハ三の物仕振お傳

志と人一人を許し一人を許しとけいせれましあひ言ふ人七
 あらん志うれと一旬二旬をくへくあれと毛全篇血脈
 とき教人志を掃也服才三控以大事なり皆初喜れ志
 を入るまてわく常れ能階ふがし七かしくはあまのえ
 初喜れ教分初喜の才三すやし七毛掃見しとら振
 才二又一凡あり常式の句の体よそ忍し終まのふあくら
 一當時兼且れ教句と稱して歳且めてちさ句大分を解
 け云兼且といふは元日明海りする時れ更へ大方兼且の句
 少てさし一せ云里正月三日を困懸四日と前出して

大津院れ毫のそく免や何佛

云向出ら此前書して後作兼且れ控式くわんしきみせし云心もて
 予教と性よ更之しゆらぬ引附ひきつけ控の内うち種たね子日こひ或ハ元
 日二日ふたひ有る云疑と知して向あり是大宛あるあやまらん
 此説ありさ友也子細ハ元日めく時ときの事といふと志れ
 里を圓まるなるの兼且入るもさか疑屋うらやの事也
 服れ仕極乃事

度野成袖よりかき野門松
 懐くを袖く中もくらま
 女子六尺長采あやかり亭里
 二りの朝あされさし玉れ酒

中へつゝ服の師こゝに再生すやうにやうかしの髪は思ひ付れど
 一人分てやうい髪を髪に人乃一やうしこゝに髪を髪にやうかしの髪は思ひ付れど
 ちひ草のくも見くは是正丹之百二日ちうてハ言のれ詞ちうり
 三日のちやおし加しんきと始しつゝ髪向の服しい髪を髪に
 中い髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に

三月八日如足燈 髪向の服しい髪を髪に
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に

百合着れこゝにちのあとも髪向の服しい髪を髪に
 芋種乃角紐む以れ髪向の服しい髪を髪に
 ちひ草のくも見くは是正丹之百二日ちうてハ言のれ詞ちうり
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に

柳如風し 柳如風し
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に
 髪向の服しい髪を髪にしつゝ髪向の服しい髪を髪に

不^レ世間十人々十人なり清くといふ事をわきまてするの事
ありてふめりみ来て空しくなりて幽玄^{ウヱン}ふれり作れ
も世らこの味^{あじ}を去るに同一度と思ひ作るべきにけ
れ去りて見る人あれ其人の心事にあらず自由^{じゆう}意^い
一^い退^{たい}善^{ぜん}物^{ぶつ}法^{ぽう}号^{ごう}妙^{めう}別^{べつ}を空^{くう}に振^{ふる}えられ七^{しち}ら^らも^もけ^け親^{しん}あ
然^{ぜん}へし是^{こゝ}亡^な師^しの洞^{どう}あ^らし^し師^しの^うま^ま也^や幽^{ゆう}玄^{げん}中^{ちゆう}一^いた^た事^じ
を^をた^た向^{むか}へ^へし^しと^とれ^れは^は不^ふ易^ぎ也^やといふに此^{こゝ}所^{しよ}に^に度^た也^やま^ま
退^{たい}善^{ぜん}の事^じい^いろ^ろく^くあり^り庵^{あん}一^い親^{しん}見^{けん}身^{しん}志^しと^と^とた^た者^{しや}或^{ある}ハ
洲^{しゅう}本^{ほん}處^{こゝ}の^の名^な人^{じん}僧^{そう}知^ち識^し強^{きやう}士^し号^{ごう}加^かと^とい^いへ^へし^し一^い年^{ねん}し^し
の^の時^{とき}一^いと^と下^げ知^ちる^るも^も志^しら^らぬ^ぬ退^{たい}善^{ぜん}一^いたら^ら天下^{てんか}と^と双^{さう}に^に遊^{ゆう}諧^{かい}

名人此退善ノ常式ト云ふ事ナドハ以テ靈魁ノ意向ニ
於テ一ヤ草葉ヲ陰ニシテ少クニ表露を以テ居レバ
人加程の要まで事付り作者を主し氣を注いで七
は是非もあらざる也 予 師進化乃時退悼一 其
かたを論じて

一度の醫者よりこのもや帰る花

とて一正小異子醫者物とむむ加事也 也晋子月
空^{くう}法^{ぽう}此^{こゝ}格^{かく}ち^ちもの^のこ^こら^らぬ^ぬ力^{りき}と^と見^{けん}へ^へり 予^よら^ら向^{むか}醫^い者^{しや}悦^{えつ}み
也^や空^{くう}法^{ぽう}の^の通^{つう}俗^{じやく}乃^の云^いふ^ふ也^や予^よら^ら向^{むか}難^{なん}難^{なん}を^を見^{けん}ん^んと^とい^いふ^ふ也^や
妙^{めう}此^{こゝ}退^{たい}善^{ぜん}不^ふ悦^{えつ}ひ^ひち^ちと^とく^く難^{なん}事^じハ^ハ不^ふ審^{しん}あり^り人^{じん}を^を事^じ也^や

懐れ公のふむせおも娘しよまれふみふとらんを後
鳥羽院法威宥しといふちうくあり

一才二才の追善深川をせ代菴をせ其くちり 予自画此
像を書せし親友ふ其前出として

此等其相無言の時乃安う那

とせーや無言のこたといふれ海新れ其也猪鳴又ふ名
もたうさ者の追善れしく焼香せられし神めうれ涙
水のあまふまを継りゆ親乃生前旅とせかれまうの
笠斗張笠り破れまうれ芭蕉う枯るれといふ事
のこふく一天下果たり雅う一人秀る向も見れんさく

たうらた志おし義也

たうらた人の裾をた、老へ細豆う那 嵐空

師の追善小中うのをまけをそは嵐空う遊借をせふお
たうらてはまらたすとすふせと面白くうれまや平子中く
う括のまををらまわ一急まはありめや

一才三年忘在所あていしちむ我ななつあやくあ
少のこま志の追善世との遊借大く見まう堀み若む
し松をせまうとくその文まう消さうなうふ事あて果へ
一追善の教向は振るふ一追善を写免て懐川の向
のとうそはせらう一三年はけて同一追善あてもあ

師、是下よのんるり師如るふ叶ひ候ひあまし
必く、あやうく師といひて

丹雪ふ淋しく、紙みる如

空いふ句して、年々集年忘の俳諧の事、既出は、加
賀、此れ、枝の葉の名、跡を、見るふ、本居、保、集、あ、句、を、い、て
あ、う、果、し、く、松、く、長、く、協、う、甚、む、し、と、そ、の、又、あ、う、ん、と
う、ゆ、か、ち、と、云、句、を、強、け、り、あ、當、い、ひ、と、う、ふ、言、ひ、あ、て、
あ、う、そ、多、ひ、た、り

一、予、節、流、入、り、の、只、月、雨、の、句、は、人、く、と、き、き、

湖の、水、を、ゆ、さ、ぶ、や、五、月、雨

といふ句、去、ら、は、ら、く、思、ふ、は、句、毎、り、あ、お、り、て、味、は、く、さ、じ
あ、て、葉、く、か、て、よ、か、く、ね、句、よ、あ、う、を、後、あ、ら、地、出、く、と、是、
生、の、句、く、

湖の水、ま、さ、り、た、り、又、月、る

と、い、ふ、句、見、ゆ、り、て、年、々、心、表、の、あ、ら、ん、地、し、て、初、て、遊、う、い
乃、心、ん、を、ゆ、さ、ぶ、是、先、生、の、恐、る、り、と、き、て、今、お、い、事、を
忘、れ、候

一、不、易、あ、句、の、事、と、海、の、句、り

青柳の、涙、ふ、あ、ら、う、夕、下、り、あ

け、句、景、曲、身、一、ち、り、あ、ら、く、と、新、古、の、更、り、う、く、と、て、教、養

叱一息一々さふ舞^{みまわ}り初て此風の血脈を得^{とら}てらるる此
風神た^とくし

津の國の難波乃其の愛され也

西行

あゝ新枯葉小風わ^らく^るる

風と^らく^るる^るれ小川のう^らる^るれ

家隆

御校と其の志^しを^らる^るれ

ま^ま柳^りれ^れみ^み志^しく^くる^るく^くり^りの^の向^け次^に虫^へ入^りて^てま^ま少^少も
お^おく^くね^ね向^け作^りみ^み小^小細^細く^く懸^懸れ^れ入^入振^振敷^敷向^向の^のう^うり^りぬ^ぬ
先^先程^程加^加く^くる^るま^まち^ちけ^け向^向れ^れ後^後も^も向^向

岸のれ^れと^とく^くる^るれ^れも^も其^其理^理を^を分^分

加^加ず^ず詠^詠ふ^ふを^をき^きよ^よら^らに^にと^と其^其雲^雲雀^雀也

そのも^もく^く青^青柳^柳の^の約^約予^予より^{より}其^其明^明也^也

一^一ひ^ひと^と世^世江^江に^にい^いて^て何^何某^某の^の某^某且^且宿^宿を^をま^まし^し極^極さ^さい^い多^多

其^其事^事あり^り予^予の^の室^室に^に四^四日^日自^自通^通多^多の後^後小^小て^て作^作る^るその^{その}日^日も^も小

口^口で^で考^考へ^へい^い系^系く^くれ^れき^きり^り其^其能^能潜^潜ふ

人^人を^をの^の沖^沖に^にい^いる^る小^小を^を呼^呼や^やらん 批^批隣

龍^龍を^を舟^舟と^とさ^さす^すに^に嘘^嘘を^を舟^舟

予^予その^{その}後^後芭^芭蕉^蕉菴^菴へ^へ系^系と^とむ^むく^くひ^ひら^らり^り時^時け^け向^向く^くる^るい^いと^とし
あ^あふ^ふ予^予り^り云^云さ^さる^るく^くの^の曉^曉の^の一^一ま^まあ^あり^りく^くる^る事^事あり^りと^とい
あ^あん^んの^の念^念の^の一^一た^たを^をり^り初^初く^くる^る事^事大^大山^山の^のこ^ころ^ろと^とい

へそ師し起おこああららてて云云吐つ唾つのの一一字字すすけけ作作りりてて思思考考、
油あぶら足あららりりけけ自みづかをを一一免免ハ

次つぎのの氣きのの舟ふねささらら不ふ考考

とと案あんしし事こと時とき前まへ向むかふふ事こと一一ままああららてて考考ののままちちしし作作
ららりりてて作作里り久くききりり其その師しのの氣きととままててハハ氣きををままちちしし
作作れれとと一一句く連れん續ぞくせせらられれりり予よりり云云是是正せい師しのの氣きより
遙とほ小こ師しささららりり勿な論ろん正せい師しのの氣きもも新あらたししききもも作作れれたた
舟ふねききりり心こころ事こととと云云下したのの七しち文ぶんままたたらられれりりととのの七しち文ぶんままたたらられれ
調しらべりりもも曉あきのの一いっままのの強つよをを受うけけらられれりりとといいふふをを師し
とと娘むすめくくたたままままれれるるんん是是種たぐい小こ師しとといいふふ人ひとややららししきき

片かたははよりより云云ひひ出でせせハハ肝かんをを治ちふふ一いっままらら龍りゆうののままたた善ぜん惡あくのの差さ
別わかれれるる一いっままらら泥どろとと醉よめももああららしし其その教しよのの向むかふふ事こと一いっままらら時とき
一いっままらら者ものとともも小こ師しままたたのの罪つみああららししとといいふふととももこれこれ句くああらら後あと
ををののせせよよとと自みづか慢まんとといいふふ宣のたまひひ侍しやく候けい
一いっ等どう類るいををののりり不ふ考考師し説せつ

都みやこををハハ案あんとともも小こ師しとといいふふ事こと一いっままらら也なり

能よ因ゆ

秋あき月つきををああららしし川かみのの園えん

都みやこととハハ昔むかしのの事こととといいふふ事こと一いっままらら也なり

能よ政せい

石いし葉は敷しきりり一いっままららしし川かみのの実み

けけとと首くびのの洞ほらがが少すくししとといいふふ事こと一いっままららしし川かみのの判はんりり云云能よ政せい

うふの能^{のうん}因^んり^ん平^{へい}不^ふ結^{けつ}く^くて^てん^ん詞^し少^{せう}く^くも^もか^かく^く祓^{はら}と^とも
 是^{こゝろ}多^た難^{なん}お^おわ^わく^くに^に於^お政^{せい}の^の事^{こと}を^を免^{めん}を^を祓^{はら}と^とも^も平^{へい}や
 こ^この^の産^{うぶ}亦^{また}此^{こゝろ}各^{おのづか}別^{べつ}ち^ちの^の変^{へん}を^を先^ま達^{たつ}能^よく^く受^うけ^けぬ^ぬて^て其^{その}ま^ま
 づ^づら^らと^とた^たく^くあ^あは^は難^{なん}あ^ある^る判^{はん}や^や加^か極^{ごく}受^うけ^けぬ^ぬあ^あら^らて^てあ^あそ
 能^よく^く面^{めん}白^{はく}く^く作^{さく}れ^れ或^{ある}と^と能^よく^く平^{へい}く^く向^{むか}ふ

朝鳥のうらを^{うら}を見^みせ^せたり^{たり}風^{かぜ}の^の秋^{あき}

こ^この^の向^{むか}ふ^ふ平^{へい}く^く向^{むか}ふ^ふ一^{いつ}丈^{ぢやう}巾^{いん}一^{いつ}加^から^らう^うな^なれ^れは^は向^{むか}ふ^ふの^のお
 こ^この^の尺^{しゃく}を^を平^{へい}く^くの^の葛^{くわ}の^の向^{むか}乃^な作^{さく}れ^れを^を平^{へい}く^くの^の尺^{しゃく}と^とい^いは^はれ^れたり
 平^{へい}は^はく^くく^くと^と於^おに^には^は向^{むか}ふ^ふ一^{いつ}も^もく^くか^から^らは^は葛^{くわ}の^の向^{むか}
 葛^{くわ}の^のう^うら^らを^を古^この^の詞^しを^を入^いり^りて^て免^{めん}て^て葛^{くわ}の^の尺^{しゃく}を

て^てい^いは^はれ^れたり^{たり}是^{こゝろ}お^おの^のう^うら^ら制^{せい}や^や葛^{くわ}の^のう^うら^らと^とい^いは^はれ^れたり^{たり}
 お^おの^の能^よく^く制^{せい}の^の尺^{しゃく}を^を平^{へい}く^くの^の尺^{しゃく}と^とい^いは^はれ^れたり^{たり}
 ひ^ひら^らの^の向^{むか}や^や古^こ人^{にん}葛^{くわ}の^の尺^{しゃく}を^を平^{へい}く^くの^の尺^{しゃく}と^とい^いは^はれ^れたり^{たり}
 う^うら^ら白^{はく}は^は先^ま小^{せう}朝^{あさ}の^の尺^{しゃく}を^を平^{へい}く^くの^の尺^{しゃく}と^とい^いは^はれ^れたり^{たり}
 向^{むか}や^や平^{へい}く^くて^て免^{めん}れ^れ向^{むか}小^{せう}類^{るい}を^を先^ま達^{たつ}能^よく^く受^うけ^けぬ^ぬて^て其^{その}ま^ま
 意^い詞^しが^がも^もか^かく^くく^く祓^{はら}と^とも^も平^{へい}く^くの^の尺^{しゃく}を^を平^{へい}く^くの^の尺^{しゃく}と^とい^いは^はれ^れたり^{たり}

清能^{せい}や^や波^{なみ}小^{せう}平^{へい}く^くる^る尺^{しゃく}月^{げつ}海^{かい}

白菊^{はく}や^や因^んり^りを^を平^{へい}く^くて^て免^{めん}れ^れる^る平^{へい}く^くも^もあ^あし^し 同

右^{みぎ}の^の向^{むか}平^{へい}く^くる^る一^{いつ}事^{こと}後^ごも^もむ^むけ^けし^して^て波^{なみ}小^{せう}教^{きやう}む^むむ^む
 相^あい^いあ^あひ^ひか^から^られ^れら^らと^と平^{へい}く^くも^もあ^あし^し見^みれ^れたり^{たり}

け若志れ越事り不周しき處をせ故不めんし如くらぬと
ふくたをさう西行と人も清浄川れ名の去く波をた
はうくよとなうや波は散むむ青松葉と涼しき波の
言ひあつよと西行れお小町れ可くは見しに

わく波や作波は横とよとれ川

時ち了急撈とやうのう

両句は横とよも若たうたふ似しとよとくも思あんする
ふわく波の横とよは作波は後行しむるも是れ事知つ
ん吟也撈をうけへるの信信を思ひ物しれ撈らふと
とさ此の若く横とよのりゆとよ水は撈は天の若く横は江

のちうくやし是似る洞て出ふ大宛ふお遠せらけ有くま
此れ句出た是時ちもあゆゆれ方ふ若舎せてとれ
折れ又通り

わくよをれ若く横とよやうのう

一若く若れは横とよやうのう

若あ句波徳り判ふ若て水れとの句よきハ先物も定言
ひて色紙送ししれ事也今ふ予う若物も是れものや
予若へその色事の徳とつ若者一生若人の継澄ちし
礼り判若来なり予ハ品は横とよ若方はさきとら若
是若又しやあすれり若れとの句遊と云りん若つ

ゆれども水のとたひりぬ洞なり初よりをまふやふれ
とて一言も砂を以て流れて去るもあはれとていひて
不幸を流徳のうけとて里に流れて去るもあはれと
ふ横にやとていひて流れて去るもあはれと
流れて去るもあはれとていひて流れて去るもあはれと
人よりふよりて一人の意よりてあはれ人ふいせを
論をさるる免あはれ人もあはれ人もあはれ人も
毎に流れて去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人も
の人より去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人も
色とも命の命に判者此流法をいひていひていひて

里に流徳を判をさるる免あはれ人もあはれ人もあはれ人も
死なぬあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
代をさるる免あはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
いひて流れて去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
正の時いひて流れて去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
いひて流れて去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
此の國よりいひて流れて去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も

日をもさるる免あはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
此の國よりいひて流れて去るもあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
日暮りぬあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人もあはれ人も
後頼

此等のあらしれ音なるをいして

けあそいにくそこれ相違もたうしゆて下白の目し細
 やんく後頼の事とゆされまといやくも定最の列小
 云く後頼の事正本教義といふあつらふて信の上
 ろくふまや也是れしれ河也新古く時代代費と定
 基後れ事まされしといふまむといふらあふのこ
 を見これしりみれといふ事いそを西本ちりいそ
 あふかといひゆりいそおしりいりいそたふれかこ
 とまをたゆれ也

一語を向ふしうんれ事し予あふしりてれよはふよこ
 事の方先く向出するし江ふよこを有くこえんとい
 し見るふりやうこえんといふ下れふ文まよそは入てを本
 かゆりまう根ふそ百是よてあふかかられまうち
 へ一時ふれくこえん江ふ横くこふとて定めてまこふ文ま
 七文まれりふ考ふといふ事ちれあふ考ふよこを
 とふ重り考ふといふ事たらあれといふ後れいり人措ひ也
 あ向甲乙各自あもかこたれあふ人く小判ををれま
 ぬへし向のよれ江ふ横くあの方ふまをれたれあも
 下れまをまのあよてよりかかぬあふあの上れよへ
 さいあもあといひてまを考別てふをまに有く

きんの杜若^{つたがき}けく云河を下のふ又まふを盡く時の上五文
ま中七ふふれらふさ^{てかこ}す^{てかこ}子^{てかこ}葉のまら^{てかこ}う^{てかこ}め時^{てかこ}のさ^{てかこ}福^{てかこ}加
屋^{てかこ}子^{てかこ}たる^{てかこ}板^{てかこ}ふ^{てかこ}成^{てかこ}た^{てかこ}る^{てかこ}の^{てかこ}や^{てかこ}一^{てかこ}急^{てかこ}れ^{てかこ}は^{てかこ}ふ^{てかこ}ま^{てかこ}く^{てかこ}う^{てかこ}や^{てかこ}
子^{てかこ}親^{てかこ}と^{てかこ}れ^{てかこ}一^{てかこ}句^{てかこ}幽^{てかこ}玄^{てかこ}ま^{てかこ}ら^{てかこ}う^{てかこ}く^{てかこ}は^{てかこ}見^{てかこ}一^{てかこ}急^{てかこ}れ^{てかこ}江^{てかこ}
に^{てかこ}携^{てかこ}く^{てかこ}や^{てかこ}く^{てかこ}云^{てかこ}和^{てかこ}す^{てかこ}て^{てかこ}ふ^{てかこ}子^{てかこ}木^{てかこ}葉^{てかこ}ま^{てかこ}ら^{てかこ}く^{てかこ}め^{てかこ}板^{てかこ}ふ^{てかこ}下^{てかこ}れ^{てかこ}
子^{てかこ}親^{てかこ}ま^{てかこ}ら^{てかこ}う^{てかこ}と^{てかこ}ま^{てかこ}く^{てかこ}板^{てかこ}也^{てかこ}又

聖と横おころいむげ上郭云

本強して葉捕もこくや子親

中^れ七^又ま^あて^たり^し板^ふま^らる^た板^ふ下^れを^くま^らる^た
申^す候^へく^まら^るた^らの^候予^らを^あら^わす^べし^やう^くく^は
申^す候^へく^まら^るた^らの^候予^らを^あら^わす^べし^やう^くく^は

吟味あふ一^{びん}微細なる所よく字ゆれ度^{かうび}流^か靡^びる^た小^{あづ}紙
里^をく^り思^ふ百^はれ^はゆ^き流^る向^たる^る人^一弓^かの^ま
く^り圓^は竹^の屋^の也^也

一世と小新しきものと今めしむたあせ^{とらちん}へ^は約^りた^あ
き^く志^きし^もの^の板^は往^り昔^{より}あ^りて^まて^んれ^は忍^ぶし^と
里^をく^り思^ふ百^はれ^はゆ^き流^る向^たる^る人^一弓^かの^ま

御後屋よとわらわき考や衣更

あ^らわ^らひ^あり^まら^ん向^は作^り等^ハう^くら^りを^した^り
り^と思^ふく^しけ^ん向^は晋^子も^あせ^まあ^らわ^らひ^あり^まら^ん
た^ある^をえ^し出^す一^は急^れ事^の并^に新^いら^り也

興きようふぶ系けいしてして心こころ捨すてれれ事ことたたふふハハ情なさけそそ有ありり一いっ番ばん子こをを江え
 戸とれれ宗そう通と慈じ門もんれれ高たかすするる事こと未まくくのの身み子このの白しろとと見みて
 ああららしし志しををたたららハハケケ極ごくれれ事ことととああやや傳たづなりり能あたりり白しろとと見みん
 復またううららわわひひああららしし當あたりり且かつもも二ふた未ま判はん六むららしし傳たづなりり
 才さいのの事こと目めととししらら仕しままししひひややひひくく白しろをを興きようふぶ系けいしし
 てて序しよももああらら時とき

海より一夜ハのん乃里と明ら

朝後屋見世松板れる士

とらふ句也江戸新朝後屋京の朝後屋たうかへは
 松板れ朝後屋とらふをたかかいはりもの也

初事やのり大佛れ柱を

海より大仏殿乃建立今免うさやうるれと
 新御殿を事万里れあまあうるり板
 とらふ句とらあまをこれ初新事のはより名入人れ
 才の事あらう也

一吉平此詞をかりて句り志う事あり
 れとらうそ其の志うるにゆえんて仕事
 下心ありてと合う事やうれんを
 いまうたう事成れ事し序う句ふ

神宮や掃ひもあく風加ははち

は向をくひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち

群鳥絨や世ハ白紗み衣更

たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち

立雲新南に志らし衣加へ

たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち
たうしき掃ひもあく風霜や掃ひもあく風加ははち

高取乃城此をうや芳野山

やと云ふ句も古里さむし此意さうらふたりぬれ里
ちり月れ前の高取山さむしさき云くぬれ里
晋子世ころれ秀逸を

鳥如身をさつを海ふその事

鳥如句也年れうと云はの秀逸たるを和りあき
やと云はり守師れ句解り一書すれとあるし
あふ後の法ふこれありのあささみをとくらせ
たれ句はさうら句よりうた句を如何に
あふしけれちも出る一志くれとそこれ何とふ
新しれ句をちう一筋の字かれこれ作者も本

意ちうくぬれ

五老井主人

森許六

子稿

元禄十一戌 寅著三丹口

去来先生

抄存下

離譜同答抄卷之四終

離譜同答抄卷之四

十一

